

研究フォーラム

- | | | | |
|----|--|----|--|
| 1 | レクを「学び」と「気づき」につなげる体験活動へ 15
～ファシリテーションスキルアップ講座～ | 19 | 家族いきいき健康upアクティビティ 33
～7人の仕事人見参～ |
| 2 | 『もしも教室』もしもの時に
備えるための減災教育とは? 16
～レクリエーション支援者に何が求められているか?～ | 20 | レク・コーディネーターと
福祉レクワーカー養成校教員が捉える
資格の本質・有効性・将来像 34 |
| 3 | 市民の心をわしづかみ!!
顧客のニーズがわかるマーケティング 17
～イベントを創るためのスキルアップ講座～ | 21 | レク・インストラクター&スポ・レク指導者が
活躍するJAPAN 35 |
| 4 | 認知症? な～んもみんなと一緒だあ 18
～あっとホームなレクリエーション支援で
生きがいの再発見～ | 22 | 新しいレクリエーション・インストラクター養成
新カリキュラム紹介 36
～心が元気になる仕組みに裏付けられた支援の方法～ |
| 5 | 化粧療法でこころの元気! 19 | 23 | レク・インストラクター新カリキュラムの
効果的な講義法の研究 37 |
| 6 | 若手がない!? 育たない!?
組織を引っ張る若手レク人材を
育てる い・ろ・は 20 | 24 | RIO2016活動レポートと、東京2020で輝く
レクリエーションの可能性を探る 38 |
| 7 | レク支援者のためのリスクコントロール 21
～事故を未然に防ぐために安全管理してますか?～ | 25 | 見て! 触って! 体験できる!
目指せ!レクリエーション用具マスター 39 |
| 8 | イランカラプテ!
アイヌ民族の生活文化・歴史を知ろう 22
～アイヌ民族の心を伝える(イランカラプテ)、
ふるさと北海道～ | 26 | スポーツ未実施者(無関心層)を掘起し、
継続へとつなげる「動機づけの支援技術」
エッセンスを学ぶ 40 |
| 9 | イランカラプテ!
アイヌ民族の遊びを体験しよう! 23
～アイヌの楽器『ムックリ』作りと演奏～ | 27 | 健康寿命を延伸するために 41
～お年寄りの元気と楽しさを醸し出す「サロン活動」～ |
| 10 | イランカラプテ!
アイヌ民族の心を描く 24
～アイヌ文様・直線と曲線が織りなす世界を体験しよう!～ | 28 | GWT財 4連発 42
～10分に1つ! グループワーク・トレーニング体験!～ |
| 11 | 北海道の自然資源 エソシカ DE クラフト 25
～世界に一つだけのオリジナルグッズをつくろう～ | 29 | 4年間の取り組み
「スポーツ大好きふくいっ子育成事業」 43 |
| 12 | 北の国から ～地球環境と富良野自然塾～ 26 | 30 | 「スポーツボランティアはレクリエーション」
2020スポボラGO 44 |
| 13 | 愛のといかけ DE プチ自分史を作ろう 27 | 31 | 笑って歌って楽しい介護予防レク講座 45 |
| 14 | 「レク・ワーカーだからこそできる支援プログラムとは」... 28
～高齢者の集団支援プログラムと障がい者の
個別支援プログラムを考える～ | 32 | もっと気軽に、
気軽にアイスプレーキングしませんか? 46
～タコさんと楽しいひとときを!～ |
| 15 | 介護予防のための実践プログラムとは 29
～新カリキュラムに対応できる支援プログラムの紹介～ | 33 | 楽しめる滑舌 47 |
| 16 | 福祉現場のレクリエーション実践を科学する 30 | 34 | Let's Singing and Dancing!! 48
～誰もが使って楽しめるミュージックダンスの
開発と実際～ |
| 17 | 「レクの最先端に行くコーディネーター大集合!!」 31
～2020オリパラ、さらにその先へ～ | 35 | 昨年は、ありがとうございましたの岐阜発信!!
「手ぬぐい太郎」がやってきた!! 49 |
| 18 | 「レクの最先端のアクティビティー大集合!!!」 32
～ひと味違う実技の展開～ | 36 | 散歩学ワークショップ 50
～楽しく歩くためのプログラム開発法～ |

1

レクを「学び」と「気づき」につなげる体験活動へ ～ファシリテーションスキルアップ講座～

日 時

平成 29 年 9 月 17 日 (日) 10:00～12:00

開催形態

ワークショップ

会 場

函館大学 2F 205 講義室

参加者数

30 名

講 師

龍 孝志 氏 (ハートエデュケーション 代表)

片山 誠 氏 (一般社団法人 72 時間サバイバル教育協会 代表理事/株式会社ココロ
代表取締役)

ねらい

本セッションでは、レクリエーション活動を通じて体験活動をより効果的に進めるファシリテーションについてアクティビティの実体験を交えて考える。また、子どもや参加者の主体的な学びを引き出すファシリテーション能力を身につけ、変化や成長につなげることの出来る「支援者」になるために必要な支援者の関わり方やコツを伝授、レクを通じた体験活動から「気づき」と「学び」を生む「ふりかえり」に迫る。



内 容

プログラムの流れ

1. ニックネームづくり (自分の呼び名を決める)
 - ・・・年齢層関係なく呼び合える関係づくり
2. グループを作りニックネームの確認
3. ネームトス・・・相手のことを気遣うことを意識する
4. パチパチインパルス⇒インパルス・・・指導の立場になったとき「人との接触」という壁を抵抗なく壊すことが出来る
5. ABC 人間知恵の輪・・・コミュニケーションを取りながら課題を解決する
6. ネームチェーン・・・グループから全体に移行するとき一気にハードルを下げやすいようにする
7. サイレントバースデイ・・・ハードルを上げていくように感じるが難易度は高くしない
8. 7-11 (セブン・イレブン)・・・周りの空気を読みながら動く
9. フラワープリレー
 - ・・・全員で相談し、課題をクリアを目指す



ファシリテーションについて

上記のプログラムの狙いは全体での一体感。フロー状態を目指す。



参加者の反応・声など

ファシリテーションの一体感の取り方・やり方が参考になりました。子どもたちが夢中になれる時間・環境づくりを大切にしていきたいと思いました。初めて会う方々と失敗した時も笑いあったり、フォローしあったり出来てうれしい気持ちになりました。

2

「もしとき教室」もしもの時に備えるための減災教育とは？ ～レクリエーション支援者に何が求められているか～

日 時

平成 29 年 9 月 16 日（土）10:00～12:00

開催形態

パネルディスカッション

会 場

函館大学 2 F マルチメディア演習室

参加者数

17名

講 師

片山 誠 氏（一般社団法人 72 時間サバイバル教育協会 代表理事／株式会社コロ代表取締役）

館岡百合子 氏（しちがはまレクリエーション協会 会長）

久保 誠治 氏（社会福祉法人熊本 YMCA 福祉会 理事）

ねらい

災害の多い日本の中で、災害が起きた時の被害を減らすための取り組み「減災教育」について出来ることはあるのか？減災教育の第一線で活躍し、「一人でも多く子どもたちが、災害発生後に自力で生き抜く力を身につける」取り組みの報告や、レクリエーション活動として『今』地域のコミュニティで出来ること、どんな備えが必要になるのか？被災地におけるレクリエーションの役割について事例報告をもとに、「減災教育」に迫る。



内 容

1. 東日本大震災について（館岡氏）

災害に対処する大事なポイントは準備と協働
仮説集会場での支援・・・会場の広さを確認する、軽いストレッチや笑顔が出るゲームを実施
季節の行事などを織り込んだイベントづくり

2. 熊本地震について（久保氏）

減災教育の目標・・・意識の向上、災害体験、歴史の継承、行動化、人材育成、リーダー養成、地域の愛着、理解、文化、コミュニティ

⇒1 個の弁当に 3 時間並んだり、寒かったり、暑かったりすることがある

これらに向けて⇒災害後 3 日間を生き延びるための備え、ともに助け合う精神、受援力を高める

3. 災害について（片山氏）

1 年目はがれきの撤去、現場に行くと具合が悪くなることも・・・

防災の取り組み⇒幼児たちもわかりやすく動物の絵や動きを使って防災を身近なものにする（ぼうさい Duck）、足腰を鍛える



これからの減災教育とは・・・一般社団法人 72 時間サバイバル教育協会が主導するプロジェクトに注目が集まっている

参加者の反応・声など

災害時のレクリエーションの必要性、どのようなことが必要か事例をもとに聞くことが出来とても勉強になりました。もしもの時のために減災教育の必要性をとっても感じました、72 時間サバイバル教育協会のプロジェクトに賛同します。「自助」から「共助」へと行くことが大切だと改めて確認できました。



3

市民の心をわしづかみ！！ 顧客のニーズがわかるマーケティング ～イベントを創るためのスキルアップ講座～

日 時

平成 29 年 9 月 16 日（土） 15:30～17:00

開催形態

ワークショップ

会 場

函館大学 2 F 205 講義室

参加者数

15 名

講 師

臼井 栄三 氏（北海道教育大学岩見沢校 芸術・スポーツビジネス専攻 特任教授）

ねらい

社会の「いま」を理解するために、そして顧客のニーズを把握してそれに応えるためにマーケティングの知識を身につけて効果的に活用していくことがねらいである。



内 容

キャッチフレーズはとても大事。ターゲットは子どもからお年寄りまでどこなのか？（例）「平成 29 年度成人歯科検診のお知らせ」で何を感じることが出来るか？成人～20 歳からだど認識するが対象は 40 歳以上だった。年度～今年のもので必要なし。検診料 500 円だというのが、いくらで検診が受けられるか明記されていない。（新）「40 歳からの 1 コインで、お口の健康」というように、ターゲットは誰なのかがわかるようにし、お客のニーズに応える商品や企画が大事。人びとの喜びを創るための知恵比べが、マーケティングの原点。

ワークショップでは、マンダラートを活用し課題のリソースを分解していくことから発想。課題解決には未来図を思い描く⇒突破口を発見する⇒具体策。年齢÷4。人びとの意識や活動を「人生一日時計」の手法を展開。



参加者の反応・声など

- ・手法を学べました。指導者同士でマンダラート法を行えば事業の課題性、可能性を共有できるのではと思います。
- ・勉強になりました。わかりやすかったです。
- ・スキルアップするのに色々な角度から考えてみる事だと思いました。
- ・受講者の話を聞いての話であったのでわかりやすく解決策を教えてもらった。優しい言葉での講義で良かった。
- ・問題を解決するための道筋に気づくことが出来ました。
- ・とても勉強になりました。自分の中で忘れていたことも思い出すことが出来てとても良かったです。ユニークなアイデア、発想法を学べました。



4

認知症？な一人もみんなと一緒にだあ ～あっとホームなレクリエーション支援で生きがい再発見～

日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 10:00～11:30

開催形態

講 演

会 場

函館大学 2 F 201 講義室

参加者数

53 名

講 師

高橋 芳美 氏 (有限会社やすらぎ 代表取締役/中空知レクリエーション協会 副会長)

ねらい

認知症施設（グループホーム）を舞台として、長年、個人の主体性を尊重し、日常生活に潤いを求めた支援を実施するとともに、独自のお祭り行事など、年間の催事を大切に、地域自治体をも巻き込み、開かれた認知症のアットホームグラウンドと、刺激的なステージを目指して取り組んでいる事例を紹介し、具体的なレクリエーション支援の方法を学ぶ。



内 容

認知症グループホームの管理者として、自身も障がい者という立場で、認知症になっても、生きがいを持って暮らせる施設づくりや、地域づくりを目指している。日常生活にレクリエーションを取り入れ、認知症が特別なものではなく、みんなと変わりなく、活躍しながら生きている姿や、地域を巻き込み、地域との関わりを画像で具体的に紹介しながら、説明をされた。

1. 認知症とは・・・利用者さんの日常の行動や出来事と絡め、『認知症は、特別な人ではない』
2. レクリエーション導入について・・・『レクリエーション=みんなで、一緒に』の思い込みがあったが、地域のレクリエーション協会との出会いにより、『レクリエーション=リハビリであり、生活を支えるものである』と誤解がとけ、レクリエーションの持つ可能性に気づくことが出来た。
3. まとめ・・・「介護が作業になってはならない」「レクリエーションも作業になってはならない」「活躍しながら生きることは、介護予防認知症予防につながる」「認知症の方でもヒントがあれば普通の人」「生きるを支えるのがレクリエーション」「レクリエーションには、無限の可能性がある」「薬服用より、レクリエーション」等の言葉で終了した。



参加者の反応・声など

自身の病院、福祉施設での勤務、寝たきりになった経験と、認知症グループホームの経営者としての体験からの、認知症についての話はわかり易く、納得できる話であった。とても、楽しく、わかり易い話だった。一緒に仕事などしたいと思える様なアットホームな感じがした。施設の紹介のみで、目指していた（期待していた）ものと違っていて残念だった。実技を持って帰りたかった（私の選択ミス）。利用者さんとのレクの内容の具体的な種類等も聞いてみたかった。認知症の知識は持っていたので、実際の実技指導又は予防方法等を学びたかった。写真や具体的なエピソードも交えての話で、楽しく参加出来た。「薬よりレクリエーション！」本当にそう思った。グループホームという環境で利用者さん同士が支えあい、利用者さんだけで散歩に行ける地域との関わりを築けていて素晴らしいと思った。



5

化粧品療法でこころの元気！

日 時	平成 29 年 9 月 16 日 (土) 13:00~14:30	開催形態	講 演
会 場	函館大学 2 F 201 講義室		
参加者数	28 名		
講 師	近江 真愛 氏 (一般社団法人美容コミュニケーション推進機構 理事長)		

ねらい

『加齢を自然に捉えて日常生活の一部としてエイジングと向き合う』
命は「与えられ」「生かされて」いるものですが、多くの人が健康寿命を全うしたいと望んでいる。力強く美しく「生き切る」ために日常で何が実践できるのか、また、お互いがどのように関わりあうのかを考える。



内 容

1. お化粧品とは心に豊かさを与えてくれるもの
年をとる事を受け止める一方で、いつまでも頑張れる自分でありたい自分の夢を実現したい…人間は生涯成長し続ける「知的生き物」
2. お化粧の効果 (生きがい感と化粧の関係)
 - ・ 高齢期の生きがい (お友達と遊びに行く、趣味仲間とお茶をするなど)
 - ・ 脳の活動が高まる / ストレスホルモンが減少する
 - ・ 筋肉を使う《化粧筋とは化粧動作に関わる筋肉・三角筋、上腕二頭筋、容器を扱う動作に関わる筋肉 (握力)・総指伸筋、浅指屈筋、第一背側骨間筋》
 - ・ 嚥下機能が向上、スキンケアで顔の神経を刺激することにより唾液の分泌が多くなり、口腔ケアにつながる。人と会うために外出する。外出するためには化粧をする。化粧をするからスキンケアは欠かせない感覚を活性化する五感 1位視覚、2位聴覚、3位嗅覚、香りの有効性、嗅覚神経は再生する。「加齢を自然に捉えて日常生活の一部としてエイジングと向き合うことが大切。」
3. 美容コミュニケーション…おしゃれ心は若さと元気の元、お化粧品は社会とのつながり
 - ・ すべての人は愛され必要とされていると感じる必要がある
 - ・ お化粧の効果は気持ちが前向きになる
 - ・ 人生の主人公は自分である



参加者の反応・声など

お化粧品は「ヤル気スイッチ」！気持ちのうるおいを超えた生き方を考える時間でした。心にメイク良い言葉ですね。年齢を重ねるほどに心を自体を若々しく、その為に化粧、身づくりが大切と思わされました。以前から化粧品療法に興味がありました。日々ケアに追われていますが、今日聞いたこと少しでも実践できたらと思います。化粧による認知症のup効果がよくわかりました。認知症の母の介護に追われる中、接するための「はり合い、やる気」ができました。介護に関わる人間として化粧品療法について理解を深めたく受講しました。女性の意見を多く聞くことができ勉強になりました。自分の為の化粧、おしゃれは一生忘れない、「楽しみましょう、おしゃれ」病気の人には香りのお見舞いを！高齢者の為の心の活性化になる化粧法のポイントを勉強して活用してみたいと思っています。

6

若手がない！？育たない！？ 組織を引っ張る若手レク人材を育てる い・ろ・は

日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 15:15~17:15

開催形態

パネルディスカッション

会 場

函館大学 2 F 201 講義室

参加者数

38 名

講 師

龍 孝志 氏 (ハートエデュケーション 代表)

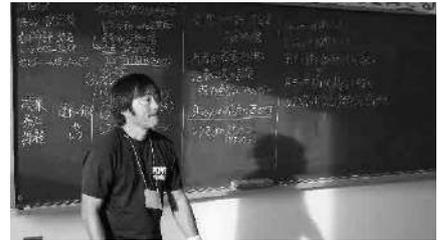
岡山千賀子 氏 (徳島文理大学人間生活学部児童学科 准教授)

津幡佳代子 氏 (三重県レクリエーション協会事務局長/高田短期大学非常勤講師)

中澤 恵子 氏 (レク・コーディネーター/スポーツアドバイザー・トレーナー)

ねらい

全国各地のレクリエーション協会が進むメンバーの高齢化、若手に活動を引き継ぎたいが、周りに若手がない、若手が定着しない。若手のレク人材に関する問題へ真正面から向かい合う。本セッションでは、現状を踏まえた問題提起から、実際に地域で活躍する人材の発掘方法や定着化へ向けた取り組みや育て方の「いろは」について、各パネラーの実践報告をもとに、次世代を担う若手人材の育成方法の課題や対応策について迫る。



内 容

若手がない問題・・・組織の継続、世代の溝、若者への魅力

- ・若者の定義・・・働き世代～子育て世代 (20代～30代)
- ・パネリストの活動

津幡氏・・・県レク認定校にて、レクに興味を持った人をセミナーに誘い、スタッフとして参加してもらい、レク好きを増やす

岡山氏・・・「ワーク・レク・バランス」、課程認定校卒業後の活動の場として青年部を設立

中澤氏・・・レク×@ (例：健康体操、話題のスポーツ、観光)、ストレッチ×公園、仲間×自己挑戦

- ・若者がいることのメリット・・・明るくなる (津幡氏)、若者が若者を呼ぶ⇒SNS (中澤氏)
- ・なぜ若者がいないのか？・・・課程認定校を卒業して一度去ってしまうと呼び戻すのが難しい
レクにワクワクしない (ほかにワクワクするものがある) ⇒だからレクに新しい要素を取り入れる
- ・若者を呼び込む秘訣
見込みのある方への声かけ、子育てなどとの両立、人間関係のフォロー、人脈、若者は組織ではなく人につく⇒若手の憧れ、尊敬の人になる



参加者の反応・声など

なぜ若者がいないのかという問いに対し若者はいるが巻き込めない。若者に最初からビジョンや使命を背負わせるのは困難、まずは意欲・センス・感性を持ってもらうことが大事。若手が「切れる・切れない」問題ではなく、「切れて」しまってもまた戻ってくる環境づくりが大切。若者が関わりたいと思える環境づくりが大切、そのために若者についてリサーチやアプローチ方法を検討する必要がある、変化が多い時代だからこそ、様々な方法を試行して結果を見て修正して対応していく必要がある。



7

レク支援者のためのリスクコントロール

日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 10:00~12:00

開催形態

講義・事例発表

会 場

函館大学 2 F 205 講義室

参加者数

20 名

講 師

新野 和也 氏 (NPO 法人どんころ野外学校)

ねらい

レクリエーション現場における危険を予測し、事故発生への対応や事故防止策を学び、保険についての基本を学び、今後の安全管理の対策、方法、緊急時での対処法を考えることを目標とする。



内 容

レクリエーション支援者にとってイベントに参加する子ども達や親子・高齢者の危険を回避し、安全で楽しい活動を提供することは極めて重要なことである。レクリエーション支援を実践する組織内で安全へ意識を高め、参加者にとって安心、安全なレクリエーション活動を行なう為のリスクコントロールについて考える内容であった。

- ・レクリエーション活動について、3つの中から選んで記入。①今行っている活動していて良かったと思った出来事。②今行っている活動でのやりがい。③今行っている活動を続けている理由。
⇒このそれぞれの答えが辛いとき、悩んだときの支えになる。
- ・すべての活動している人のほとんどは安全だと思っている。危なかったねというヒアリハットが300ある。怪我をするかもしれないことを常に予測しておくことが重要。
- ・SNSはものすごい速さで拡散するため気を付けてほしい。事故を起こさないことが一番であるがすべてを負わず起こってしまったことは謝る。
- ・ラフティングは野外で行われる川下りでリスクを伴うものである。危険であることを最初に参加者に伝えている。トラブル(落ちた時)があった場合の対処法、ヘルメットやジャケット装着で実践するため事故はほとんどない。
- ・川、海で溺れた人を助けようとして死亡することもある。支援者は①スタッフに対する安全教育②指導者の義務と責任③支援者として準備すべきこと④支援者に求められる資質・能力⑤危険の種類について⑥事前のリスクマネジメント⑦活動に潜んでいる危険⑧保険について⑨実施中・事後のリスクマネジメント⑩中止基準⑪参加者に対する安全教育⑫伝える事について⑬緊急時の対処⑭外傷や病気の対処法について学び念頭に置きながら参加者を安全に楽しく活動させなければならない。



参加者の反応・声など

最後のテーピング実技は特に良かった。理論の理解は私にとって勉強になりました。帰ってから必要な物を作成したいと思います。「相手に伝わってないのであれば伝えたこととは言わない。」初心に戻れる言葉でした。自分の知識の確認と新しいことが学べた事が良かったです。ありがとうございます。リスクを予見する力をつけて対処法を考えていきたいと思います。勉強になりました。リスクの洗い出しや指導者、主権者の法的責任指導現場でのリスク管理の具体例など大変参考になりました。今後の活動に生かしていきたいと思います。

8

イランカラプテ！アイヌ民族の生活文化・歴史を知ろう 「アイヌ民族の心を伝える(イランカラプテ)、ふるさとは北海道」

日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 10:00~12:00

開催形態

講演 (一般公開講座)

会 場

函館大学 1 F 161 中講義室

参加者数

50 名

講 師

加藤 敬人 氏 (公益財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構アドバイザー)

ねらい

アイヌとは人間の意味です。アイヌ文化のふるさとは北海道で、この地の言語や舞踏など豊かな文化を育んできた。「イランカラプテ」おもてなしの心、挨拶で、歴史と心にふれる。



内 容

イランカラプテ…おもてなしの心、あなたの心にそっとふれさせて下さい。

1997 年 北海道旧土人保護法廃止 アイヌが土人から旧土人へ

2004 年 国連が世界人権宣言

2008 年 6 月 6 日衆参議院で日本先住民として求める決議が採択された

アイヌ文化は鎌倉時代から始まった。

鉄は鍋等の生活用品に使い、やじりに毒を塗って使ったが、アイヌから人を殺すことはなかった。



アイヌの生活圏は青森から上のサハリン、千島列島、函館から青森に昆布が渡った (昆布はアイヌ語)。安藤家は 12 の館をつくったが、松前藩の元祖武田信玄がコシャマイン (長万部) を使って滅ぼした。

1669 年 シャクシャインの戦い…松前藩とシャクシャインに率いられたアイヌの戦い (アイヌにとって不利な条件の交易が原因) 和睦 (つぐない) の酒宴の席でシャクシャインがだまし討ちにあい毒殺される (この流れが 100 年続く)。

1789 年 クナシリ・メナシの戦い…この戦いによって松前藩は国後島や道東のアイヌの人たちを制圧し、その支配下に組み込んだ アイヌの人たち最後の戦いとなる。

明治政府→無主の地⇒日本の植民地化でアイヌのわずかな土地でさえもだまし取ろうとした。

日本人ほど先住民族を無視する国はない。北海道の主であったアイヌと日本政府の間に条約 1 つない。

※アイヌ文化だけでなく自分達のアイデンティティー (尊厳) を残していくことが大切 共生していく事が大切。



参加者の反応・声など

アイヌ文化を伝承する事の意味をもう一度じっくり考えるのを感じた。土人といわれるほどの人種差別があったとは思いませんでした。アイヌ民族の歴史の苦しさが分かりました。アイヌ文化の素晴らしさに触れられて良かった。全てのものに命がある。絶対に無駄にしない心伝える「イランカラプテ」本当に共生目指していくには皆が色々なことを知ることが大切と思いました。休憩時間も惜しそうに 2 時間熱意のある講義に感動し感謝します。沖縄の歴史文化との共通点を再度確認できて感無量でした。正しい歴史を学ぶ大変良い講話でした。アイヌ民族としての使命感にふれて感動いっぱい時間で満足です。心に響きました。沖縄も沖縄のアイデンティティーを大切に「心」を伝え続けたく活動したいと思っています。語り継ぐ歴史を子どもたちにもたくさん話していきたいと思いました。映像もあるとよりイメージしやすかった。

北海道企画

日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 15:15~17:15

開催形態

講演・ワークショップ

会 場

函館大学 2 F マルチメディア演習室

参加者数

50名

講 師

杉村 忍 氏	(公共財団法人 アイヌ文化復興・研究推進機構	アドバイザー)
早坂 ユカ 氏	(公共財団法人 アイヌ文化復興・研究推進機構	アドバイザー)
新谷由美子 氏	(公共財団法人 アイヌ文化復興・研究推進機構	アドバイザー)
小川カヨ子 氏	(公共財団法人 アイヌ文化復興・研究推進機構	アドバイザー)

ねらい

日本の先住民族（アイヌ）の生活文化、祭りや先祖供養などに演奏されていたムックリ。

アイヌに伝わる竹製の楽器、口琴（こうきん）と呼ばれる楽器の 1 種を制作し演奏する。



内 容

<作り方>

①竹を彫刻等で同じ方向に削る

※薄く削りすぎてもダメで時々指ではじいてカチッと鳴る鳴りぐあい確かめる。

②ひもの長さは、小指にひっかけて、しっかりと押さえられる長さ

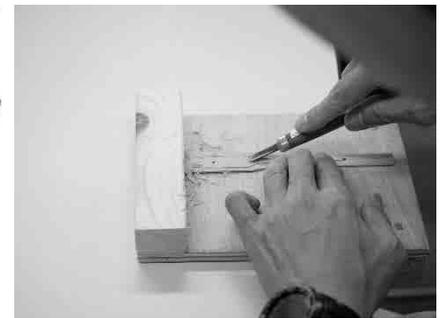
<鳴らし方> ※右利きの人（左利きの方は逆）

①つるつるした面を自分の方へ向けて持つ

②左肩を水平にして絶対に動かさない

③右第二関節でノックするように斜め上に引っぱり、鳴るポイントを探す

④口が切れないように左手の親指を口の端にあてる



参加者の反応・声など

教え方がとても上手で、あきらめないでやる事ができとても良い音が出るようになりました。なかなか思うように作業ができなかったけれど、先生に手伝っていただき、貴重な楽器を手にてできて感激です。削る作業は大変でしたが、先生方が優しく直してくださいました。楽しい楽器遊びでした。一つの共鳴を通してコミュニケーションの言語として伝えられていることを学びました。鳴るまで家で練習します。机、イスの数が足りなく会場の設営がなくて不満。



日 時

平成 29 年 9 月 17 日（日）10:00～12:00

開催形態

講演・ワークショップ

会 場

函館大学 2 F マルチメディア演習室

参加者数

39名

講 師

杉村 忍 氏	（公共財団法人 アイヌ文化復興・研究推進機構	アドバイザー）
早坂 ユカ 氏	（公共財団法人 アイヌ文化復興・研究推進機構	アドバイザー）
新谷由美子 氏	（公共財団法人 アイヌ文化復興・研究推進機構	アドバイザー）
小川カヨ子 氏	（公共財団法人 アイヌ文化復興・研究推進機構	アドバイザー）

ねらい

なぜ文様を彫るのか？アイヌ民族が日用品、儀礼用具などに文様を施したのは、美的な意味合いばかりではなく魔除けや守護を願う信仰に基づくものだったと考えられる。講演していただきながら、実際に刺繍による文様作りを体験する。



内 容

＜縫い方＞

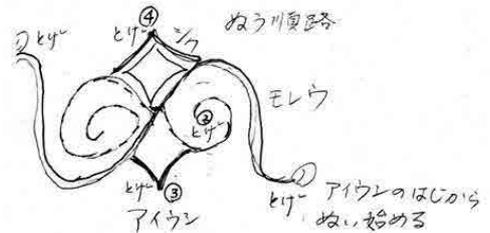
- ①布の下から針を通して、糸を左側にくるようにしておき、その糸の3mm下から布をすくう
- ②布をすくったまま針を抜かずに糸をかけるとチェーンが出来る
- ③チェーンの中に上から針を刺して布をすくい、糸をかけるの繰り返しで縫っていく

●シク

- ・下から円の中を通して針を出す

●とげ

- ・ここから針を入れて円の中に戻す
- ・そこからチェーンを始める



参加者の反応・声など

素敵な作品ができて良かったです。文様が飾りだけでなくいみあるものとして受け継がれていることを改めて理解することが出来ました。機会があったら、家でもやってみたい。先生が色々と材料を準備し丁寧に指導して下さり、ありがとうございました。パターンの意味や言い伝え等も説明して下さったので有意義でした。沖縄の文化によく似たアイヌ文化が体験できてとても良かったです。先生方の衣装がとても素敵で興味を持ちました。



日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 13:00～14:30

開催形態

ワークショップ

会 場

函館大学 2 F 205 講義室

参加者数

54 名

講 師

若松 時彦 氏 (有限会社若松毛皮 代表取締役)

ねらい

北海道の限られた大地の中では、現在、人間と野生動物たちとの距離も自然に近くなっている。特に、北海道のみに生息している、エゾ鹿の増えすぎによる問題は、様々な分野に影響を及ぼし深刻化している。そんなエゾ鹿も「北海道の一部！貴重な資源！」として、やむなく、捕獲されたエゾ鹿を活用して、「オリジナルグッズの制作」を楽しみながらも、“命”と“自然環境保護”を考え、自然資源の活用の大切さを知る。



内 容

あまりにも増えすぎた為、エゾ鹿の被害が 50～60 億円と言われている。やむなく捕獲された鹿たちも貴重な資源である。当日は、角を使い、北海道ならではの、オリジナルアクセサリを作り、お土産として持ち帰る。たくさんエゾ鹿の皮、ツノ、工具が展示される教室に参加者も圧倒されてのスタートとなった。

当初、エゾ鹿による被害の現状などについての報告の予定だったが、参加者が多数のため、時間内完成を第一に、すぐに制作に取り掛かる。

<制作プロセス>

- ① 様々な形、大きさ、色のツノから好みのものを選択する
- ② 好きな部分から、大きさを考え、工具でカットする
- ③ 紙やすりを使用し、切り口の角をなめらかになるように磨く
- ④ ボール盤を使って穴を開ける
- ⑤ ネックレス…レザーひもを自分に合わせて調整し、ウッドやプラビーズを通し、ひもを結んで完成！
キーホルダー、ストラップ…開口部分にカンをねじ込み、アロンアルファで固定。輪カンを一度ゆるめ、キーホルダーに金具と角を通す。再度、輪カンを絞めこんで完成！

講師の「何より 楽しんで！」の発声からスタートした制作。「作る」楽しさ、順番を待つ（工具の使用）間の「交流」の楽しさ、完成した時の「達成感」の共有と、レクリエーションならではの『たのしさ』を共有することが出来た。



参加者の反応・声など

エゾ鹿のツノを切ることから体験した。自分だけのオリジナルのペンダント楽しく作れ、北海道の良い思い出の作品になり感謝。自然資源の活用でオリジナルの自分の記念に作ることが出来た。バンザイ！！順番を待っている間、出会いもあり、嬉しかった。北海道ならではのクラフト。フォーラムに参加出来、函館の思い出になった。貴重な生態を捨てることなく、素敵なものに加工出来て良かった。参加人数の割には、部屋が狭く、順番待ちも長かったが、スタッフさん達が親切で、出来上がりには満足。スタッフに助けられ作品を完成することが出来た。心に残る思い出づくりを楽しみながらできた。クラフトの醍醐味を味わえた。できれば、もう一つ作りたかった。大人数のため、若干、手順が見えない。待ち時間が長く、指導の講師も大変そうであった。有効活用の大切さはよくわかった。楽しかった。手作りのオリジナルはいいなあー。

日 時	平成 29 年 9 月 16 日 (土) 13:00～15:00	開催形態	講演 (一般公開講座)
会 場	函館大学 1 F 161 中講義室		
参加者数	28 名		
講 師	林原 博光 氏 (NPO 法人 C・C・C 富良野自然塾 副塾長、専務理事)		

ねらい

私たちの生活から及ぼす地球環境への影響と損失、そして… “希望” を大自然である北の国から考えてみる。地球環境の現状を検証・理解する。



内 容

1. 人間に最重要なものは、空気と水この大切さを身をもって感じる為に、5分間の息止めを参加者全員で行う。…いくら人間が地球上の生物の中で頂点に思えるかもしれないが酸素が無ければ5分と命を繋ぎとめる事が出来ない。まずは、この点を心に刻んだ。(参加者との感想のやりとりがある。)
2. 地球環境の現状(50年前～現代～50年後)環境問題の一つに地球温暖化があがる。これは私たちの生活が豊かになればなるほど進行していく、いわば国民の生活水準が向上すると共に地球にダメージを与えてしまうという皮肉な現象である。世界経済の発展と同時に CO2 が発生するという相関関係にあるのが地球環境問題の解決を困難なものにさせている。(DVD 使用)
3. 食品ロス問題
日本国の食料自給率は 38%。一方、全国のコンビニ店舗約 5 万店で廃棄される弁当は百万食。富良野の農家でも規格外の農産物は山の麓に捨てられている。世界を見ると依然と飢餓に苦しんでいる人・国がある。ムダを減らす取り組み・システムはないのか？私達個人で出来ることはないのか？もう後はないと思って考える時期ではないのか？(DVD・パワーポイント使用)
4. 生態系問題
白クマの絶滅危惧や南極大陸の地形をモデルに地球環境の変容を確認した。“絶滅とは、永遠に戻らないということ”最後に、環境全般や教育全般でいえるのは、“人を幸せにするのは人です”。物や金ではないということ。
自然を大事にする子ども育てよう！(DVD 使用)

参加者の反応・声など

身近な生活とマクロ(地球)をつなげた視点で説明があり、環境に対する意識を高めることができました。地球環境について温暖化などについて深く考えさせられました。食糧の廃棄問題、規格外の野菜など、少しでも少なくできる解決策が見つかるように自分でもできることをコツコツと行っていきたいと思います。本当に現代に生きる一人の人間として真剣に考えていかなければならない問題だと、改めて感じさせるテーマをいくつかみる事ができ、とても有意義な講義だと思いました。環境のことについて映像や画像を混ましながら分かりやすく学べたと思います。食品ロス等、身近にできることから少しでも未来の子どもへ残せる地球をやっていきたいと思います。最後の方に話された自然と子どもとの関わりをもっと聞いてみたかったです。具体的な数字による説明や例があり、分かりやすかったです。参加者の質問にしっかりと答えていただいたので、講演の補いをしてもらえたように思う。



日 時

平成 29 年 9 月 17 日（日）10:00～12:00

開催形態

ワークショップ

会 場

函館大学 2 F 視聴覚室

参加者数

17名

講 師

谷本あゆみ 氏（ライフワークパートナー 医療福祉のビジネス質問家）

ねらい

過去から現在、さらに未来への「愛のといかけ」を通じて、忘れていた、自分の人生の歴史を思い出すきっかけにしてほしい。そこからまた始まる、充実した人生の締めくくりを創造する有意義な時間へとつながるような、「といかけ」の手法を学び、プチ自分史をつくる。



内 容

1. 自己紹介と「といかけカード」の紹介
2. グループ内で自己紹介・・・①名前 ②どこから来たの？ ③どんな活動をしているの？ ④参加理由
3. といかけカードを使っての質問、返答（答えたくない場合はパス）
4. 最後に、どんな気づきがあったかをグループで話し合う

福祉施設での勤務経験、ケアマネジャーとしての体験等を活かし、コミュニケーションツール「愛のといかけカード」をクラウドファンディングを使って開発。制作は福祉施設の利用者さん、文字は伝筆（つてふで）協会認定講師であることから、自筆で作成。48枚の「といかけカード」には、過去から未来にかけて、それぞれ「といかけ」が書かれている。参加者が1枚ずつ選び、順番に答える。答えない自由も有る。といかけを通して、日常会話では聞き出すことの出来ない生活歴や本当の思いを表情、会話から引き出すことができる。そこから、高齢者と支援者との信頼関係を築いていくことを目的としている。<例>○どこへ行きたいか○恋の思い出○誰に一番可愛がられたか○春といえば・・・等



参加者の反応・声など

他人の話聞くのは、エネルギーが必要なことがわかった。参加者同士での話し合いが多かったのが、賑やかであった。自分の過去を振り返る場面では、笑顔の人、涙する人と、それぞれの人生があることが分かった。講師の優しい話し方、といかけの仕方が勉強になった。講師からもらった、メッセージカードを見せ合うなど、和やかな雰囲気良かった。レク財として、対象者、質問等アレンジ出来るので、活用したい。たくさんの方の愛情がいっぱいのカードに感動した。講師のパワフルな、行動力、発想に刺激を受けた。



日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 10:00～12:00

開催形態

ワークショップ

会 場

函館大学 1 F 大講堂

参加者数

44名

講 師

杉浦 史晃 氏 (全国福祉レク・ネットワーク副代表/福祉レク・ワーカー)

富栄 さやか 氏 (全国福祉レク・ネットワーク常任委員/福祉レク・ワーカー)

大原 知加 氏 (全国福祉レク・ネットワーク会員/福祉レク・ワーカー)

ねらい

高齢者の集団支援プログラムと、障がい者の個別支援プログラムについて考えます。それぞれの現場で、レク・インストラクターや、福祉レク・ワーカーが、日頃どのような仕事をしているのかや、長年の取組の中での活動のノウハウを紹介しました。

また、支援の在り方について、ディスカッションをとおり、参加者とともに考えました。



内 容

●富栄講師 (障がい者施設において個人への支援になるプログラム)

紙コップ魚釣り：釣りが好きだという利用者に向けて実施。達成感があるように工夫し、成功体験ができる素材となっている。

コラージュ作品づくり：声かけ、ほめ伝えで、利用者とのコミュニケーションが深まるように努め、活動をとおりて当人の興味等が見えるようになった。

<大事にしていること>

- | | |
|----------------------------|-------------|
| 1 見通しが持てる安心感 | 2 解りやすい説明 |
| 3 個人への配慮 | 4 プログラムの柔軟性 |
| 5 基本のパターンができれば、新しい活動も取り入れる | |
| 6 楽しさの共有 | |

<コーディネーターまとめ>

APIE プロセスを踏まえながら、コミュニケーションの困難な方々が同じ場所で活動できている。利用者の成長や変化をしっかりと見ている点がプロフェッショナル。



●大原講師 (多様な介護度の利用者に、少人数で提供するプログラム)

「笑顔を引き出す」と「雰囲気づくり」を心掛けてきた。バルーンアートは安全に行なえる上、リハビリ効果もあった。施設では、参加者には世話を焼きたい人もいるので、一緒に手伝ってもらうことで、スタッフが声かけしてもだめなのに、参加者同士でうまく行くこともある。

<コーディネーターまとめ>

グループで一つの作品をつくることも楽しい。支援者自身の趣味を生かして説明がわかりやすく、また参加者といい雰囲気で会話のキャッチボールが出来ている点がプロフェッショナル。

参加者の反応・声など

全国福祉レクリエーション・ネットワークの若手の全国大会デビューをねらった企画でもあったが、参加者からは大変好評で、「説明、雰囲気が良かった」「実践的な内容で、現場の状況についてもよくわかり、明日からの参考になった」「現場に持ち帰ってやってみようと思うものが多くあった」「若い発表者にエネルギーをもらった」「すぐに使える実践的なものだった」などの感想があった。また、「現場での悩みもあるが、また頑張ってみようと思った。」という意見も聞かれ、企画者としては概ね満足できる評価であった。

日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 13:00～15:00

開催形態

ワークショップ

会 場

函館大学 1 F 大講堂

参加者数

77名

講 師

荒深 裕規 氏 (全国福祉レク・ネットワーク副代表/福祉レク・ワーカー)

湯川 恵子 氏 (全国福祉レク・ネットワーク会員/福祉レク・ワーカー)

田島 栄文 氏 (全国福祉レク・ネットワーク常任委員/福祉レク・ワーカー)

炭田 亮子 氏 (全国福祉レク・ネットワーク常任委員/福祉レク・ワーカー)

ねらい

平成 29 年度からレクリエーション・インストラクター養成カリキュラムが変更されました。レクリエーションという言葉の主旨(目的)が「人々の心を元気にすること」とされたことから、レクリエーション支援の強みは、人々の心が元気になることを手助けできることであり、それこそが専門性なのだと解されます。

新カリキュラムを意識した支援プログラムとして、折り紙やゲームを使ったプログラムを紹介しました。



内 容

- 湯川講師(折り紙クラフト): トーテムポールにもなるペンギンづくり
- 田島講師(ゲーム): 間違い探しに始まり、「大相撲力士の名前思い出しゲーム」。相撲つながりで「指相撲」、続いて京花紙で「こより相撲」。(こよれない参加者も多くこれ自体が指の体操になっていた。)、こよりつながりで「風トンボ」、紙コップで、風トンボを受け止める「風トンボキャッチ」。今度は紙コップを2つ使って「紙コップ飛ばし」などストーリーを考えた素材が発表された。
- 炭田講師(脳トレを意識したゲーム): コールにあわせた拍手に続き、椅子からの「立ち上がり運動」は、いくつかの動作を続けて立ち上がることや、条件にあてはまる人だけ立ち上がるといったバリエーションを入れながら、だんだん速くしてハードルを上げる。
一重円になり、新聞紙を一人1枚使って、振る、叩く、つぶす、投げ上げるなどをして音を出し、2人組で新聞紙を裂く。裂いた新聞紙を真ん中で投げ合うアクティビティーに移行。ばらばらになった新聞紙を固めて、包装紙をのりにしておにぎりをつくる。それを使ったお手玉送りで終了。

<コーディネーターまとめ>

それぞれの講師のプログラムには、ストーリーがあり、流れがあって素晴らしかった。新カリキュラムの中では、さまざまな理論づけのあるアイスブレイキングモデル等も提示されているので、今日の実践を参考に明日からの人材育成等にも役立ててほしい。



参加者の反応・声など

新カリキュラムでは、「高齢者に向けたモデルプログラム」などが取り上げられていることもあり、これまで以上に理論を意識したプログラムの提供が求められている。

このことを受け、全国で活躍されているベテランの福祉レクリエーション・ワーカーが、一つひとつのアクティビティをどのようにこなしてプログラムとして提供しているかを実際に体験していただくセッションであった。参加者からは、「楽しすぎて時間が経つのを忘れた」というほど、盛り上がったセッションであり、3人の講師の変化にとんだ現場づくりが大変好評であった。

新カリキュラムに沿った解説もあり、課程認定校の教員にもよく理解していただけるものとなった。

また、福祉の現場にも役立つアクティビティが、短時間で数多く紹介されたこともあり、「どれもが身近にできるもので、明日からの職場で使ってみよう」という声も多く聞かれた。

日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 15:30~17:00

開催形態

講 義・セミナー

会 場

函館大学 1 F 大講堂

参加者数

58 名

講 師

涌井 忠昭 氏 (全国福祉レク・ネットワーク副代表/福祉レク・ワーカー)

南條 正人 氏 (東北文教大学短期大学補任編福祉学科副学科長/福祉レク・ワーカー)

高崎 義輝 氏 (仙台大学体育学部健康福祉学科教授/福祉レク・ワーカー)

ねらい

介護現場において、クライアントの QOL (生活・人生の質) の向上にレクリエーション活動は欠かせません。前半では、現在、介護現場でどのようなレクリエーション活動が実践されているのかを紹介していただきました。また、レクリエーション活動の有効性を説明するためには、エビデンス (科学的根拠) が重要となります。後半では、福祉領域におけるレクリエーション活動のエビデンスについて、研究成果を解説していただきました。



内 容

コーディネーターより、これまでの全国大会の経過、趣旨説明、講師紹介等があり、南條講師、高崎講師の順で発表を行なった。

●南條講師

2009 年から「介護課程 150 時間」の実習の中で介護課程の展開が明確になった。実際、実習の中でレクリエーション支援がどれくらい行われているかを調査した結果について発表があった。

短期目標として、離床、ベッドサイド、余暇活動などがあげられ、レクリエーション支援が 7 割程度行われていることが明らかになった。

課程認定校と非認定校での違いについても調査したが、その結果、課程認定校卒業者と非認定校卒業者のいずれであっても、多様で多彩なレクリエーション支援が実施されていたと報告された。

●高崎講師

CiNii (NII 学術情報ナビゲータ[サイニィ]) を利用した論文検索の結果、レクリエーションに関する論文はあるものの、「レクリエーション」に関する言葉遣いの困難さから、レクリエーションのエビデンスが十分に示されていない現状が報告された。

文献の種類や研究の対象などについて詳細な説明もあったが、それらが科学的エビデンスに結び付きにくいことも報告された。

コーディネーターからアクティビティの検索結果や研究デザインについての確認があり、フロアーからの質問に基づき、活発な議論が展開された。



参加者の反応・声など

静岡、滋賀、福井と「キックオフミーティング」を行い、「福祉レクリエーションの価値を高めるためにエビデンスを出して世に問うことが必要だ」という視点に立ち、福岡、福島、長野の大会では、「実践記録を積み重ねることの重要性」について議論してきた。今回は昨年の岐阜大会に続いて、「エビデンスの確立に必要な実践記録」をテーマに、研究者の発表を直接聞くセッションを実施した。参加者の意識も高く、福祉レクリエーション・ネットワーク企画のセッションの中では最も多くの参加者を集めるセッションとなった。参加者からは「現場で必要とされている割に軽く見られている。」「もっと努力して認められるようにしたい。」という意見と並行して「研究」「根拠」「エビデンス」という言葉に、まだ「少々敷居が高い」という感があることが見て取れた。一方、「もっと質の高いものが要求されていることを感じた。」という前向きな意見も多かった。

日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 10:00~12:00

開催形態

パネルディスカッション

会 場

函館大学 3 F 学生ホール

参加者数

34名

講 師

澤内 隆 氏 (一社 東京都レクリエーション協会理事/文教大学講師)

師岡 文男 氏 (公財 日本オリンピック委員会総務委員/上智大学教授)

大木 潤子 氏 (全国レコ・ネット理事/千葉県レク・コーディネーター会会長)

佐藤 節子 氏 (全国レコ・ネット事務局長/座間市レクリエーション協会会長)

猿田 重昭 氏 (全国レコ・ネット会長/千葉県レクリエーション協会理事長)

ねらい

レク・コーディネーターが社会の要請に応え、飛び出すための元気を分かちあうセッション。

- ①今、レク・コーディネーターに求められているもの。最先端の情報提供。「第2期スポーツ基本計画」、国・都道府県・市町村行政とレクリエーション。
- ②東京オリ・パラでのレク・コーディネーターの役割。さらにその先は～。



内 容

1. 会長の猿田氏より、セッション⑰～⑲の関連主旨およびセッション⑰についての主旨説明。
2. 澤内氏より、2020オリ・パラへのプレゼン。雰囲気づくりと、意識高揚。
3. 師岡氏より講義 ①最先端のレク情報。②2020オリ・パラへの参加の提言。
4. 大木氏、佐藤氏によるワーク・ショップ。「私は、オリ・パラにどうかかわるか」
5. 大木氏による質疑応答とセッションのまとめ。

参加者の反応・声など

充実していた。オリ・パラは観るものと思っていたが、参加してみたくなった。勇気をいただいた。楽しいひとときでした。基調提案、プレゼン、講義、ディスカッションと、会の流れがよかった。時間が短く感じた。



日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 13:00～15:00

開催形態

ワークショップ

会 場

函館大学 3 F 学生ホール

参加者数

64名

講 師

牧本 光夫 氏 (全国レコ・ネット理事)

猿田 重昭 氏 (全国レコ・ネット会長/千葉県レクリエーション協会理事長)

飯田 弘 氏 (東京都レク・コーディネーター会会長/全国レコ・ネット理事)

松戸 良一 氏 (柏市レクリエーション協会会長/ひまつぶしくリエイトセンター長)

ねらい

「楽しくてためになるアクティビティ」実践家に登場してもらい、楽しさの展開演出、実技の効果などを体験していただく。

音楽レク、脳トレ、アイスブレイキングの見直しなど、盛りだくさんの内容で実施し、次のセッションにも連動。



内 容

人々のニーズに応える実技。今改めて実技を見直し、レコ・ネットの執行部が、議論を重ねてきた実技論を、実際のアクティビティを展開しつつ、参加者に実感を体験していただいた。

①レク・ソングの殻を破り、音楽とレクの接点の追求を、「オリパラ」にちなんだ曲の歌唱指導を実施した。

②脳トレを手がかりに、福祉現場で、支援者が利用者への支援のあり方に迫った。

③アイスブレイキングが本当にレクの本質になっているだろうか。見直し案を実技展開の中で紹介した。

参加者の反応・声など

実技の考え方に打たれた。自分の実践を見直したいと思った。楽しかった。その中に学ぶことが多かった。アイスブレイキングの意味を考え直す機会を得て、良かった。



日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 15:30～17:30

開催形態

ワークショップ

会 場

函館大学 3 F 学生ホール

参加者数

63名

講 師

飯田 弘 氏 (東京都レク・コーディネーター会会長/全国レコ・ネット理事)
 松戸 良一 氏 (柏市レクリエーション協会会長/ひまつぶレクリエイトセンター長)
 朝武 紀雄 氏 (埼玉県レクリエーション協会理事/全国レクダンス指導者連絡協議会事務局長/全国レコ・ネット理事/公立小学校教頭)

ねらい

レコ・ネットが展開する、おなじみのセッション。健康寿命・元気アップにつながる「楽しくてためになるアクティビティ」実践家7人に登場してもらい、楽しさの展開演出、実技の効果度、などを体験した。

内 容

＜7人の仕事人による実技の展開＞

- 「手づくりマラカス」 紺野好子氏、佐藤紀彦氏 (北海道)
- 「指笛・手笛体験」 塩谷彰宏氏 (青森)
- 「アイスブレイキング」 瀧 康秀氏 (静岡)
- 「アイスブレイク・指遊び」 久保誠治氏 (熊本)
- 「ゲーム」 小谷正治氏 (高知)
- 「レク・ダンス」 朝武紀雄氏 (埼玉)
- 「締めコールあれこれ」 川島裕子氏 (神奈川)



- 講評：副会長 飯田 弘氏 セッション19の講評と、本会担当3セッションのまとめ

参加者の反応・声など

楽しかった。いろいろな先生が、次々に展開してくださり、あっという間の2時間でした。ありがとうございました。さすが、日常のレクのプロです。勉強になりました。前のセッションとの連携を感じた。実技は大切だと思います。



日 時

平成 29 年 9 月 16 日 (土) 10:00~11:30

開催形態

パネルディスカッション

会 場

函館大学 2 F 2 5 4 講義室

参加者数

19名

講 師

コーディネーター

仲野 隆士 氏 (仙台大学副学長 同大学体育学部体育学科長 教授)

パネリスト

犬飼己紀子 氏 (松本大学人間健康学部スポーツ健康学科 教授)

佐近 慎平 氏 (新潟医療福祉大学健康科学部健康スポーツ学科 准教授)

南條 正人 氏 (東北文教大学短期大学部人間福祉学科副学科長 准教授)

小池 和幸 氏 (仙台大学スポーツ健康科学研究実践機構 副機構長 教授)

ねらい

大学で取得できる資格には様々なものがあるが、その中でレク資格を取得する優先順位は高くないかもしれない。取得する資格が、就職や仕事にどれだけ役に立つかで優先順位が決まるのが現実であろう。しかし、少子高齢化が進む日本では子供たちの体力低下、中高年者の生活習慣病の増大、孤独な老人の自殺など深刻な社会問題がある。これらの問題に対して、レク資格が大いに役立つことをご理解いただきたい。



内 容

犬飼氏からは松本大学が地域立大学として実施する地域住民との交流事業の紹介があり、その中で社会参加を通じて学生が学外で体験的に学び育つことの重要性について報告があった。その後、地域社会にレクリエーションの有効性を体験的に知らしめる活動など、資格取得者獲得につなげる方策を確認した。

佐近氏は、A1の普及と雇用の関係や支援者の介入度とレクリエーション領域の関係など様々な視点からレクリエーションを分析、その有効性について考察した。また、レク資格は現場で集積された実践知が伝達可能な形式知に合理的に変換されていることが重要であることなど、その本質についても考察した。

南條氏からは東北文教大学短期大学部が福祉レクリエーション教育として実施する学科行事「ぶんきょうサロン」と「介護福祉フォーラム」について紹介があり、その取り組みが学生の高齢者理解に有効であることの報告があった。さらに、介護福祉士のサブライセンスとしての位置づけによりレク資格の有無による差別化が図られることなどを確認した。

小池氏は、レク・インストラクターのカリキュラム内容からレクリエーションの本質について考察した後、福祉レクリエーションとその専門性について考察した。介護福祉士のサブライセンスとしての位置づけや体験的な学びによる資格取得、資格取得者の技能による他資格との差別化など、資格取得者獲得のための方策について確認した。

参加者の反応・声など

時代の移り変わりによって変わる部分と変わらない部分、ボレーションして課題に取り組み、ともに未来に進みたい。とができた。資格取得者の活躍の場をいかに確保するか、課題は多いと感じた。パネリストの先生方の取り組みは大変興味深く、資格の将来像をより良いものとするために必要なことはなにか、このセッションを通じて考えさせられた。資格取得者数が減少する一方、資格そのものの価値は増加している。社会の期待に応えられるような取り組みが必要であると感じた。資格取得者を増やすためには新規の取得者を増やすことも重要であるが、一方で一度取得した人の更新率を上げることも重要であろう。資格の有効性や将来像を広く世に示すことが大切であると感じた。

現状と課題を共有できたと思う。仲間とコラボレーションの本質を改めて理解するこ

